Osaka University Knowledge Archive

Title	日本ホスピス・在宅ケア研究会全国大会に参加して
Author(s)	
Citation	臨床哲学のメチエ. 2001, 8, p. 30-33
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/9432
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

日本ホスピス・在宅ケア研究会 全国大会に参加して

6月30日、7月1日の両日、大阪国際会議場で「日本ホスピス・在宅ケア研究会、第９回全国大会 in大阪」が開催された。この研究会は、末期がん患者のホスピスケアや高齢者の難病・障害を持つ人々の在宅ケアの理念と実際を学びあい、それを広めることを目的として、医療者および市民が組織している全国規模のグループである。研究会は毎年各都市で全国大会を催しており、今年はそれが大阪であった。

臨床哲学研究室のメンバー数名は、１年以上前の企画段階から、この大イベント（のべ来場者数3000人以上）にかかわり、その縁で大会では鷲田清一さんに「聴くことの力」を講演していただくとともに、プログラムの１つとして「臨床哲学Cafe&Bar」の企画・開催を担当した。また、別のプログラムであるグループ討論「介護 give and take」には、私たちの研究室に毎度来て下さっている障害者介護人の長見有人さんの企画の下に、伊藤悠子さんと臨床哲学研究室の大学院生（桑原・会沢）がテーブルリーダーとして、また中岡成文さんがテーブルリーダー・コメンテーターとして参加した。さらに、展示会の責任者および看護部会の司会として、社会人大学院生の西川勝さんも活躍した。

ここでは、３つのテーマで行った「臨床哲学Cafe&Bar」および「介護 give and take」の模様を、それぞれ報告してもらうことにする。（堀江剛）

臨床哲学 Cafe&Bar

「自己決定」

進行役：渡邊美千代
サブ進行役：中岡成文、会場係：森芳周

参加者は50人以上を越え、座り切れないほどの盛況ぶりであった。立ったままで自らの体験を語る人、床に座ったままで議論の行く末を見守るように聴く人といったように『自己決定』に対する関心の高さがうかがえる。議論は、治療を受ける側の患者として自己決定に迫られた体験や医療者の立場から患者の自己決定にどう関わったらよいかといった討議が進められた。

その中で次のような問いが提示された。「人間は本当に自己決定できるのか」「死を目前にすることで、なぜ自己決定が問題にされるのか」「自己決定をしても、しなくても自己の身体責任は何も変わらない。それなのになぜ自己決定を問題にするのか」「自己決定に際し、医療者にどこまでの裁量が求められるのか」「自己決定の自己はどういう意味をもつのか」などである。問いに対する答えを導き出すには至らなかったが、語るすべての人が自らの経験を生きられた体験として伝え、聴く人は、日頃の疑問として自らの経験を重ね合わせ、生きられた体験を分かち合えるかのように耳を傾ける中で共有の場となったように思う。また「よりよい治療を受けるための自己決定として、セカンド・オピニオンとしての医師をもちたいが、今までの主治医に気兼ねしてしまう。」といった参加者の語りからセカンド・オピニオンについての日本の現状を情報交換する場ともなった。また専門職である医師と患者が協同作業することが、自己決定していくプロセスに大きな影響力をもつことを全体で確認することができた。参加者の多くから、もっと討議する時間がほしかった、もっと哲学的な議論を深めたいといった感想が出された。時間の制約はあったが、今後、進行役としての技術を高めていくことを自らの課題としたい。

今回初めて進行役を務めながら、生と死のはざまを経験した人の語りそのものに耳を傾け、共にその苦しみを分かち合おうとすることに臨床哲学の可能性があり、臨床哲学の今後の展開に期待されているのだと改めて実感することができた。（渡邉美千代）

「親切とおせっかい」

進行役：会沢久仁子、サブ進行役：服部俊子、会場係：桑原英之

部屋を斜めに使用する形で平行四辺形に机を設置し、参加者は20人程度という予想を大きく上回り、50人位の大人数で開始されました。進行役が事例を呼びかけると、待ち構えるかのように多くの事例が出されました。

震災の時、ボランティアに参加したら、住民から「帰って下さい」と言われたこと。落ち込んでいる友人に関わったら、自殺してしまったこと。親からの電話で嬉しい、うっとうしいと感じる会話のちょっとした違いのこと等。会の半ばからは医療、福祉系の専門職者の参加が多かったためか、対人援助職の人間として関わる際の事例に変わりました。介護訪問先の患者家族の思いが異なる時にどうすればよいのか。僧侶としてあるいはカウンセラーとしてどうすればよいのか。福祉関係者からは生活保護を勧めるのはどこまでがよいのか、患者にどのような距離をもって関わればよいのか等。違う「価値」をもつクライエントに関わる、専門職としての自分の「あり方」に、議論が集中した時もありました。しかし、参加者から元のテーマへ方向修正する意見が出され、「親切とおせっかい」を感じる側、感じさせる側と分けて考えるのではなく、両者のコミュニケーションのありかたや対話が重要ではないか、という議論が少しなされたところで時間切れとなりました。最後に、参加者から「なぜこのテーマになったか」ということが進行役になげ返され、ホスピスボランティア体験からテーマ設定までの経緯を説明し、閉会しました。仕事上で悩んでいる方が多かったためか、終始事例が提示されるという流れでしたが、意見は会場全体から出され、大人数ながら全員が参加できたように思います。（服部俊子）

「QOL とは何か」

進行役：堀江剛、サブ進行役：三浦隆宏、会場係：岸田智

私たちのチームが、今回研究室として初めて、会議場２階のカフェキューブというほんもののカフェでCafe&Barを行うことになった。カフェの半分のスペースを借りきり、ホワイトボードの周りに椅子40−50席と幾つかのテーブルを並べる。会議室のような密室ではなく天井も高いので音が逃げる。BGMも流れている。参加者が集中して議論できるのか、少し心配であった。開始時間を少し過ぎたところでほぼ席も埋まり、私（進行役）は声を大きめに、そして参加者には人の発言に注意深く耳を傾けるようにお願いして、Cafe&Barが始った。

まずはQOLに関する具体的な体験や感じ方を、手を挙げた人から述べてもらう。大会の性格であろう、ほとんどがナースをはじめとした医療関係者、福祉（介護）関係者、そして看護や介護を必要とする（した）当事者の家族の人々である。議論はおおよそ、施設や専門家が当事者のQOLのために行おうとすることと、当事者一人一人のQOLとのギャップや食い違いが焦点になった（と私は感じた）。もちろん発言のうちには観点や状況設定の違いがあり、それらの偏差が刺激となって、新しい疑問や考えを生み出していく。中には「そもそもQOLが問題になるのはなぜか」といったラディカルな問いも出た。

しかし開始から約１時間半、意見も出そろい議論も白熱したところで、そろそろ議論を収束させなければならない。結論が出ないことは織り込み済みだが、ここから焦点を１つに限定して深く議論できるな、と思ったところで時間切れとなる。少し残念だ。そのためには、臨床哲学Cafe&Barを連続的・恒常的に開催することが必要だ。議論が終った後で、参加者の何人かから同じ感想を打ち明けられた。

また会場撤収の関係上、時間が来てお開きを宣言してから、そそくさと参加者を追い出してしまったが、本当はその後、参加者たちがカフェにとどまってゆっくり歓談できることができればと思った。そんなひとときが議論の前後に、また途中にあってこそ、“ほんもののカフェ”で行う意味も出てくるのだから。議論に必要なのは、そんな贅沢な時間である。臨床哲学Cafe&Barが提供し、また創出しなければならないのは、余白も含めたその「時間」だと今回強く感じた。（堀江剛）

グループ討論

「介護 give and take～双方向の介護をめざして」

6月30日の午後、ぜいたくなほど広い会議室に約60人が参加された。前半の１時間強は、6人の小グループで６テーブルに分かれ、利用者、家族、介護職、医療職、市民がそれぞれの立場で「介護」というテーマにかかわる具体的な自らの体験を語り、互いに聴くということから始めた。どのテーブルリーダーも落ち着いた雰囲気を保ったため、参加者はそれぞれの体験を語り合うことができた。

後半の１時間は、各テーブルから一人ずつ選ばれた参加者がモデルグループを編成し、コメンテーターの中岡成文さんが進行役となって絞られたテーマ「介護…発想と立場の転換」について議論した。しかし、小グループの中では活発だった、車いすの障害者など〈介護される側〉の人からの発言がなく、〈介護職〉対〈看護職〉の議論に終わってしまったのは残念だった。

広い層に関心の高かった同日午前のミニシンポ「介護とセクシュアリティ」を含めて、「介護をめぐって」の企画全体に統一性をもたせる工夫が主に企画した私に欠けていた。また、〈例〉から〈問い〉を立てることやファシリテーターの役割について「ソクラティク・ダイアローグ」の形式を応用しようとしたが、関係者の方々のご協力をいただきながら、中途半端になってしまった。内容と形式それぞれに反省中です。（長見有人）